母親の養育態度に関する研究
― 子どもに対する愛着表象に着目して ―

高　城　絵里子

【問題と目的】

愛着の世代間伝達のメカニズムを探求する研究はこれまでにさまざまな視点からなされている。そこで得られている知見は，“「母親が自身の被養育体験をどのように内在化しているか」と，「子どもの行動にあらわれる愛着パターン」との間に関連がある”ということや，“「母親が自身の被養育体験をどのように内在化しているか」によって母親の示す養育行動に違いが出る”といったことである。しかしこれまで，“「母親が子どもについてどのように感じ，どのような愛着表象を持っているか」と，母親の実際の養育行動との関連”を示す研究はなされていない。子どもについての愛着表象と実際の養育行動との関連は，愛着の世代間伝達のメカニズムの中でもより直接的に結びつく次元であると思われ，これらの関連を実証することは意義深いものであると考えられる。そこで本研究は，愛着の世代間伝達のメカニズムの一部を実証するために，母親の子どもに対する愛着表象と，実際の養育行動との間の関連を検討することを目的として行った。

【研究１】

目的：母親の子どもに対する愛着表象と，実際の養育行動との間の関連を量的なデータで検証することと，付加的に母親の子どもに対する感情や養育行動に影響する要因を探索的に検討することを目的として行った。

方法：乳幼児を養育中の母親183名を調査対象とし，質問紙法によって実施した。質問紙は，①デモグラフィック要因，②母親の子どもに対する愛着表象の一部として母親の子どもに対する感情を測定する愛着尺度，③母親の養育態度尺度，④抑うつ尺度から構成された。

結果：因子分析の結果，母親の子どもに対する愛着尺度は①接近感情因子，②回避感情因子，③弱い子どもイメージ因子の３因子が，母親の養育態度尺度は①厳格で拒否的な養育態度因子，②溺愛・盲従の養育態度因子，③あたたかい養育態度因子の3因子が抽出された。続いて，母親の子どもに対する愛着尺度と母親の養育態度尺度との関連を相関分析で検討したところ，接近感情は拒否的で厳格な養育態度と有意な負の相関が，温かい養育態度と有意な正の相関が見られた。また，回避感情は拒否的で厳格な養育態度と正の相関が，温かい養育態度と負の相関が見られた。弱い子どもイメージは溺愛・盲従の養育態度，あたたかい養育態度と有意な正の相関があった。以上から，子どもに対する愛着の種類によって，関連する養育行動の側面に違いが出るということがわかった。また，付加的に母親の子どもへの感情や養育態度に影響を与える要因を探索的に検討したところ，父親との関係や母親の就労状況，子どもの数，母親の抑うつの程度などが要因として示された。

考察：研究１では，子どもに対して養育者がもつ感情・愛着と，養育態度との間に関連があること，また，子どもに対して養育者がもつ感情・愛着の種類によって，関連する養育態度の種類に違いでることが明らかとなった。しかし，①母親が子どもについてどのような愛着表象を持っているか，実際の養育行動はどんな様子なのかついて，本研究で使用した尺度では捉え切れていない部分が多いこと，②質問紙に答えるということによって，母親のそのままの感情を歪めた結果となる可能性があるが，調査の結果からはそれらについて記述できないこと，などの問題点があがった。

【研究２】

目的：研究２は，インタビューと食事場面観察を実施して得られた質的なデータにより，母親の愛着表象と実際の養育行動との関連をより詳細に検討することを目的とした。

方法：研究1の調査対象者のうち協力同意を得た10名の母親とその子どもを調査対象とした。子どもに対する愛着表象を測定するものとしてZeanah（1994）によって開発され，青木によって作成されたインタビュー（Working Model of Child Interview）の日本語版を実施し，母子相互作用を測定するため母子の食事場面のビデオ録画を行った。

結果：１．母親の愛着表象の分類

インタビューについて，Zeanah（1994）の開発したコーディングシステムに従って調査対象者の愛着表象を分類した。その結果，「安定した愛着表象」を有する母親９名と「混乱した愛着表象」を有する母親1名に分類された。分類には「離脱した愛着表象」もあったが，ここに分類された母親はいなかった。

続いて愛着表象の各分類の特徴を把握するために，２名についてインタビューの内容を事例として提供し比較した。以下に各愛着表象の特徴を簡単にまとめる。

Case１-１．Ｋさん（安定した愛着表象）

Ｋさんは子どもについての質問に対し，子どもの

positiveな側面もnegativeな側面も十分に受け入れた上で，それについて自身がどのように感じているかも含めて一貫した形で答えていた。また，子どもとの関係を大切にしていて楽しんでいる記述や語りをしていた。さらに毎日の子どもとの関係の中で母親自身が窮屈感や解離，不安などとらわれを感じている様子や記述がほとんど見られなかった。

Case 2 - 1．Aさん（混乱した愛着表象）

Aさんは子どもについてたくさんのことを語るものの，その内容は具体的な記述に基づくものではなく，矛盾する内容が多くでていた。よってAさん自身が子どもとの関係についてどのように感じ，体験しているかについて一貫した情報が得られなかった。また，子どものことについて聞いている質問に対してAさん自身のことに内容がずれてしまうといった特徴が見られた。

2．愛着表象分類間での食事場面における母親の行動の比較

愛着表象の各分類での食事場面における母親の実際の養育行動について，インタビューの事例と同じ対象者（KさんとAさん）について事例を提供し，プロトコル分析をおこなって比較した。以下に各愛着表象の母親の養育行動の特徴を簡単にまとめる。

Case 1 - 2．Kさん（安定した愛着表象）

Kさんは，食事場面において子どもがだんだん食事に飽きてきて，Kさんの思い通りに動かなくなり心理的に負担のかかる状況になっても，負担のかかっていなかった状況と同様で，一貫した対応を子どもに対してとろうとしていた。具体的には，終始子どもを食事に引き付けるような方略（スプーンをくねくねさせて「スプーン飛行機とんでっちゃうよー」と言うなど）や食事を楽しくするような声かけ（「Yくんのおなかにきいてみようかなー」など）を工夫し，やさしい話し方をしていた。Kさん自身に心理的負担がかかる場面では，席を外したり，他のものを食べるよう提案したりと，Kさん自身と子どもの気持ち切り替えをして再び楽しい雰囲気で食事を再開できるようにしていた。

Case 2 - 2．Aさん（混乱した愛着表象）

Aさんは，子どもの様子が変化するにしたがって，それまでと一貫した対応を取る余裕がなくなり，母親自身の表象や行動が変化して，子どもに対して母親の気持ちをダイレクトにぶつける形での関わりが多くなった。Aさんもはじめは Kさんと同様，楽しい雰囲気を作りやさしい調子で子どもに合わせた内容の声かけをしていた。しかし，子どもが席を立ちはじめ注意しても席に戻らなくなるにつれて，Aさんは子どもをにらんだり，威嚇したりと力で子どもを押さえつける対応を取らざるをえなくなり，暗くイライラした表情になっていった。食事場面の雰囲気も険悪なものへと変化した。

考察：以上のように，安定した愛着表象を有する母親は，子どもとのかかわりにおいて基本的に一貫した対応をとっており，相互作用の雰囲気や，母親の要求の伝え方などを子どもの個性に合わせた形で提示していて，安定した関わり方をすることができるという結果となり，安定した愛着表象と安定した関わりとの関連が示された。

これについては，安定した愛着表象を有する母親は，“この子はどういった子どもか”について，子どもの個性や特徴，性格などを詳細に，かつ的確に捉えていることから，母親自身が子どもにどういう対応がよいのか，この子どもにはどのような対応をすると受け入れられやすいのかについて，母親なりの理解と確信を持っているため，多少の子どもの変化に揺り動かされることなく母親独自の対応をすることができるようになるものと思われる。子どもに対する母親の安定した行動の背景にはこのように，子どもについて母親に確固としたイメージがもてていることと，それを柔軟に母親が調節し受け入れていること，つまり安定した愛着表象を有していることが存在するものと考えられた。

一方混乱した愛着表象を有する母親は，子どもとのかかわりにおいて，母親自身の心理的状況によって関わり方が矛盾し変化するということが示され，混乱した愛着表象と一貫していない混乱した養育行動との間に関連があるということが示唆された。これについては一つには，混乱した愛着表象を有する母親が，子どもについて“この子はどういった子どもか”という個性や特徴を一貫した形で捉えることができず，子どもについての矛盾した印象を母親自身が整理できないままに持っているために，“こうすればこの子には受け入れられる”という確固とした子どもへの対応の方法を構築できないことに起因するものと考えられた。

【総合考察】

本研究では母親の子どもに対する愛着表象と実際の養育行動との関連が明らかになった。しかしさまざまな課題と今後の展開として5つの視点が提示された。それらは，①この結果を一般化するためにサンプル数を増やして，離脱した愛着表象と養育行動との関連についての検討も含めより詳細な検討を加えること，②愛着表象と養育行動との関連だけでなくそれらに影響する他の要因についての視点を加えること，③相互作用場面における子どもの役割を考慮すること，④母親の子どもに対する愛着表象や養育行動と，母親自身の被養育体験との関連，子どもの愛着スタイルとの関連などを検討し世代間伝達のメカニズムを探るより広範な研究へと発展させること，⑤子どもへの愛着や養育行動に問題や悩みを抱える母親に対して効果的なサポートの手段を提示すること，である。